

5-14. 2011年東日本大震災（東北地方大平洋沖地震）から10年

私たちは、2011年3月11日14時46分に途方もない地震を経験しました。78年宮城県沖地震の時もそれなりに大きく感じましたがそれ以上の激しさを今でも思い出します。この地震は海底25kmで発生したマグニチュード(M)9.0という巨大地震でした。最大震度7が栗原市で観測され、揺れは北海道から九州までと広範囲に及び津波が沿岸の広い範囲で発生し、多くの犠牲者が出ました。そして、この地震で、牡鹿半島では東南東方向に5.4m水平に移動し、約1.2mも沈降する地殻変動が発生しました。この地震はプレート境界地震で、その震源域は岩手県沖から茨城県沖まで及んでいて、南北400km、東西200kmにわたり最大のプレートのずれが40m以上とされています。その後の余震は時間とともに減少しているものの、時に中規模な地震が継続して発生している状況です。

また、このような大地震が発生したことで、震源域から離れたところでもその影響で発生直後には、長野県北部地震(M6.7)や福島県での直下型地震などが連続し、その影響は広範囲に及びました。その影響が顕在化していなくても多くのところでダメージがあるのではないかと、それが様々に今後顕在化するのではないかとということも思い浮かびます。

そして、東北、関東・中部地方にかけてこの地震による地殻変動は継続されていて、最近1年あたりでも東向きに4cm、隆起5cmとなっていて地震前の状態には戻っていません。

海底では、地殻変動は続いて福島県沖では東向きに最大年間4cm、宮城県沖周辺もここ4年間の平均で西向きに最大9cmの地殻変動があることが報告されています。確かに直後に比べれば、その変動量は小さくなっているものの元に戻ったわけではありません。

わが国は地震列島であり災害列島であることを十分に意識して、大きな地震があったからしばらくはないだろうなどと思わないことです。実際に東日本大震災関連の余震といわれるものや、最近では2019年の山形県沖での地震はM6.7で新潟県村上市や山形県鶴岡市で被害があり、その年の8月には福島県沖でM6.4、石川県能登半島沖でM6.1と、決して地震が少なくなったということではありません。首都圏や南海トラフでの大震災の可能性も高いことを忘れてはいけません。また、2019,2020年には台風や豪雨による大きな災害もありましたが、発生する自然災害の個々の大きさも気になりますが、様々な災害が重なった時への対策も必要となっています。地震対策、豪雨災害対応、コロナウイルス感染症対応というようなものが重なった時にどう対応するのかは、現実的に可能性が高いということも考えておくべきことです。この災害への対応というのは、発生した時に適正な対応をとることは極めて難しく、日常を超えてのことはできないと考えておくぐらいでなければならぬといわれています。もちろん、東日本大震災の状況は忘れることはできませんが、その後の様々な災害などを見聞したり、新型コロナへの不安などが重なってくると、当時の思いが薄くなっていくことを実感します。しかし、自然災害は必ず来ることは確かだし、モノの復旧や機能の回復はできても、本当の復興にはまだ遠いという感慨があり、改めて自然災害への対応を真剣に考え続けることが求められていると思います。